
黒の女神

華月 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の女神

【Nコード】

N8423N

【作者名】

華月 彩

【あらすじ】

人気作家である主人公が、小説家を引退する理由とは？名画モナリザに魅せられた主人公が体験する、不思議な物語。

明日間さん、とおっしゃいますか？変わったお名前ですね。今日は「D誌」の取材ということでしたね。あの雑誌は私もたびたび拝見してます。毎回特集が面白くて・・・。

さて、何から話しましょうか？まずなぜ私が突然小説家を引退することにしたのか、その理由についてですか？

――わかりました。少々長くかかりますが、お時間の方はよろしいですか？

突然ですが、明日間さん、あなたはあのレオナルド・ダ・ヴィンチが描いた「モナリザ」の絵を御存知ですか？もちろん知っている？――ええ、それは誰でも一度は見たことがあるかもしれません。――やはり本物は見たことはありませんか。ええ、あれがあるのはパリのルーヴル美術館ですからね。なかなか見に行くのは難しいかもしれません。しかし、彼女のあのかつて一度盗まれたほどのあの何とも言えない魅力ある微笑みは、ブラウン管やカメラのフィルムを通じてでは伝わらないものようです。

あれはもう十五年ばかり前、私がまだ二十二歳で、大学の卒業を来年に控えた春のことでした。

幼いころにすでに両親を亡くしていた私は、当時大学の近くにあった安アパートの一室で、翻訳のアルバイトをしながら大学に通い、その一方で小説家を志していたので小説を書いては出版社に投稿する、という生活をしていました。

ある日、出版社に投稿した私の小説がちょっとした賞をとり、まとまったお金が手に入りました。かねてより私は海外旅行というものに憧れておりまして、それもヨーロッパの、フランスに一度行っ

てみたい、とただひたすらに思っていました。ですから大学でもフランス語の授業は毎回とっていましたし、翻訳のアルバイトも、主にフランス語のものを扱っていたのです。そして、その夢をかなえるために、むだ遣いもせずにこつこつと貯金をしていたので、それらを合わせるとようやく念願のフランス旅行がかなうだけの金額に達していたのです。私は心が一足先にフランスに旅立ってしまったかのような気持ちで、旅行の日取りなどを着々と決め始めました。大学の夏休みは長いので、その間に行くことにし、せっかくの海外旅行なのだから、と教授に頼んでカメラも貸してもらいました。大学の友人達はどいつもこいつも似たり寄つたりの貧乏学生でしたから、私の記念すべき初めての一人旅となりました。

なぜ私がそれほどまでにフランスに行きたかったのか？それはもちろん、かの有名なルーヴル美術館を始めとする数多くの美術館に行き、古い町並みを歩きたかったからです。「モナリザ」を始めとする数多くの絵画や、「ミロのヴィーナス」を始めとする数多くの名作をこの目で見てきたかったからなのです。

一日目の夜に空港につき、フランス語の教授に教えてもらった安い宿に一泊して、翌朝早速ルーヴル美術館へと向かいました。

美術館の中はとても広く、その広さときたら全部見るのに三日はかかるというほどです。できることなら全部見てまわりたいのですが、なかなかそうもいかないのです、とりあえず彫刻は本命の「ミロのヴィーナス」と「サモトラケのニケ」、絵画はできる限り目におさめて帰ろう、と思いました。

「ミロのヴィーナス」や「サモトラケのニケ」の、あの欠けたものもつ美しさ、と言いますか、あれを見たときの私の感動は言葉ではとても言い表せないほどで、私は半ば夢中でシャッターを切りました。

そして、次の絵画のコーナーに向かい、いくつかの絵を見た後で、私は彼女と出会ったのです。

彼女とは誰か？もちろん「モナリザ」のことですよ。私は写真では見たことがありますが、実物を見るのはこれが初めてでした。そして、私は彼女をこの目で見たとき、その瞬間に、文字通り恋に落ちてしまったのです。

言うなれば、あれは「魅せられた」とでも言うのでしょうか。そう、かつて一度盗まれたことがあったというほどの、世界中の人々を魅了したあの微笑に、私も魅せられてしまったのです。

私はどうにかして彼女を手元に置きたい、と思いました。しかし、彼女は美術館に保管されている絵画ですし、よほど盗むか何かしなければただの学生のもとにおくなどということはできず、やはりこれから就職もしなければならぬ私にしてみれば、そうすることもできないのでした。

私は時間が経つことも忘れてその場に居続けましたが、やがて閉館の時間が近づくと、私は彼女と別れなければならない運命を悲しみながら、なるべく彼女が大きく、美しく写るように、と願ってシャッターを切りました。

帰り道の私は、まるで最愛の恋人と死に別れたような気分でした。写真はとって見たものの、今まで何度か写真で見たことはありましたが結果は見えていました。彼女のあの美しさは、写真にはおさまらないだろうと。私には彼女の、実物のもつ美しさが必要なのだと。

ぼんやりと歩いていましたから、どこをどう歩いたのかわかりません。誰かに話しかけられたような気がして、ふと我に返ると、そこはすでに明るい大通りではなく、町外れの、左右が木で囲まれた並木道を歩いていました。

「学生さん」と、もう一度フランス語で呼びかけられて、ようやく気がつきました。私がたつた今通りすぎた辺りに、年老いた、でも品の良い老人が、絵画に囲まれるようにして腰掛けていました。

「私の言葉がおわかりになりますか？」老人は品の酔い笑みを浮か

べて、ゆっくりと言いました。

「はい、わかります」と、答えて頷くと、老人は感心したように大きく頷いて言いました。

「見たところあなたは東洋から来たお方のようだが、何だかずいぶん深刻な悩みでも抱えておられるようだ。私でよければ相談に乗りますよ」

私は何かにすがりたかったのかもしれない。私はその老人の横に腰掛け、子供のように泣きながら今までのこと、つまり「モナリザ」との出会いと悲しい別れのことを話しました。

すると、老人は笑いもせず私の話を聞いてくれ、聞いた後で泣きじゃくる私の頭をまるで母親がするように優しく撫でながら、こう言いました。

「悲しいことだが、それはどうしようもない。あれは世界の人々に自らの魅力を分け与え、感動を与えるためにあそこにいるのだから。しかし、あなたがそれほどまでに思い詰めておられるなら、本物とは行かないが、私が魂込めて描いた模写をあげよう」

こう言って、大きな平たい絵の包みをくれました。そっと包みを開いてみると、そこにはさつき見たものと寸分変わらない彼女の微笑がありました。私の心はさつきまでの暗い気分が嘘のように言葉では言い表せないほどの喜びに満ちあふれ、老人に手厚く礼を言って別れました。

帰国すると、私は早速彼女をアパートの自室の一角に飾り、彼女を眺めながら小説を書き、翻訳のアルバイトをしながら大学に通う生活に戻りました。彼女を眺めていると、不思議なことに次々とアイデアが浮かんでくるのです。やがて、小説の方が軌道に乗ってくると、私はアルバイトをやめ、小説を書きながら大学に通いました。大学を卒業すると、狭いアパートを引き払い、騒がしい都会を離れて小さい家を買ひ、その一室に彼女を飾って小説を書き続けました。

やがて、私は一つのシリーズを書き始めました。それは主人公の喪服をまとった美女・エレオノーラが数奇な運命をたどる物語で、それが私の代表作ともなった「黒の女神」シリーズです。エレオノーラのモデルが「モナリザ」であることは言うまでもありませんが、この小説が予想外の人気を得たので、私は今の軽井沢の家を建て、そこに住むようになりました。

そして、今年の春、奇跡は起きたのです。その夜、私は「黒の女神」の締め切りが迫っていたので書斎に閉じこもってほとんど不眠不休で原稿を書いていました。辛くはありませんでした。目を上げれば、そこにはいつも「モナリザ」の微笑がありましたから。とは言うものの、さすがに徹夜が三日も続くと意識が朦朧としてきました。私は一息ついて、ぼんやりと「モナリザ」を眺めました。これまで、幾度となく私を癒してくれたあの微笑みを。

すると、何とも不思議なことが起こりました。私の中からだかいつの間にか浮き上がり、彼女と視線を同じくしていたのです。そのまま私の体はどんどん彼女に近づいていき、彼女とくちづけを交わしたかと思うと、そのままどんどん彼女の中へと吸い込まれていきました。

気がつくと、見覚えのある異国の風景の中にいました。見覚えがあるはずでした。そこは、私が彼女を見るたびに幾度となく見てきた、「モナリザ」の背景だったからです。

やがて、向こうから誰かが歩いてきました。黒い服に謎めいた微笑。まぎれもなく「モナリザ」でした。

彼女は私の手をとると、甘い声でそつと私にささやきました。ずいぶん頭がぼんやりしていましたが、それでも彼女が「私と一緒にここで暮らしましょう」と言ったことだけははっきりとわかりました。

私は彼女の手をしっかりと握ると、二人で異国の街並みにそつて

歩き始めました。と、そこにもう一人、行く手をふさぐ者がいました。モナリザと同じ、黒い服。しかしその髪は黒髪ではなく、鮮やかな金髪でした。——そう、彼女は私がついさつきまで書いていた「黒の女神」の主人公・エレオノーラでした。彼女は、あなたがこの世界にとどまってしまうたら、私のこの数奇な運命はどうなるのだ、とでも言いたげに、きつと私の顔を見据えて立っていました。私は急に現実に取り戻されたような気がして、ふとモナリザを見ました。彼女は、今まで私に見せたことがないような悲しい顔をしていました。そして、急に体が大きく揺れたように感じ、気がつくとい私はもとの書齋に戻っていました。

あれは夢だったのだろうか？と思いましたが、違っていました。そう思つてふと顔を上げると、壁に掛かっていた「モナリザ」の絵が、泣いていたのです。表情は変わらない、けれどその両の瞳からは二筋の涙が流れていました。それを見て、私は悟りました。皮肉にも、私が彼女をモデルにして書いた小説の主人公が彼女の恋敵となつてしまった。彼女の数奇な運命に終りを作らなければ、私は開放されないのだと。

ずいぶん話が長くなりましたが、これで私の話は終わりです。「黒の女神」の最終回をハッピーエンドにしたのは、エレオノーラがまた恨み言を言つたりしないように、と思つたからです。女性の嫉妬ほど怖いものはないようですすね。

- + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

あの若い編集者は何だか異様なものでも見たかのような顔をして、私の話を聞くなり早々に引き上げてしまった。何を恐ろしがることがあるう。私が語つたのはただの恋物語。ただ一つ普通と違つのは、

相手が生きた人物か、それとも絵画の中の人物か、それだけだとい
うのに。

まあ、どちらにしても彼には早く帰ってもらったほうが好都合だ。
今日は私と彼女の結婚記念日になるだろうから。

書斎のドアを開けると、「モナリザ」が微笑んでいる。今まで数
えきれないほど見てきたその微笑みは、歡喜の喜びに満ちあふれ、
今にも口を開いてこう言い出しそうだった。

「いとしい人よ。早くこの胸に」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8423n/>

黒の女神

2010年10月8日13時18分発行